

# 寛永5年徳川期大坂城普請にかかる 大名丁場割絵図記載内容の再検討

Reliability of *Daimyo Chobawari-ezu* depicting  
the construction of Osaka Castle in 1628

北野 博司 KITANO Hiroshi

## 要 旨

元和6年から寛永5年にかけて3期に分けて行われた徳川期大坂城普請の大名丁場割や各大名の施工規模を知る史料として「普請丁場割絵図」がある。本稿では3期分すべての丁場割を描いた絵図群について、大名家の決算帳簿を底本としてその記載内容の精度を検討した。その結果、石垣の地口寸法は帳簿や絵図書写の過程で1字違いや桁のずれなど、誤記をかなり含むことが判明した。

これは3期分をまとめた丁場割絵図が、竣工図というよりは、後世に過去の事業を記念、顕彰するような目的で作成されたため、典拠とした史料の詳細をチェックするような性質のものでなかったためと解釈した。利用にあたっての注意を喚起するとともに、復元した地口寸法に基づいて第3期工事分の新たな普請丁場割図を作成した。

キーワード：徳川期大坂城 公儀普請 普請丁場割絵図 石垣 地口寸法

## 1. はじめに

徳川期大坂城の本工事は元和6年(1620)、寛永元年(1624)・2年、寛永5年(1628)の3期に分けて実施された(図1)。本稿はこのうち寛永5年の第3期工事、二ノ丸南外堀普請にかかる大名丁場割や役負担の実態を再検討することを目的とする。

徳川期大坂城普請の参加大名や普請丁場割については、伝来した丁場割絵図や幕府及び諸大名家に伝わる文献史料を用いた長い研究の蓄積(小野1890、岡本1970、内田1982、松岡1988、渡辺1989、中村1986・2009、木越2012a・2012b)がある。また、石垣刻印調査による丁場割や組編成の実態にアプローチする研究も行われてきた(村川1962・1970、藤井1977、北野2012)。

本稿が課題とする第3期工事については、前田家や毛利家、蜂須賀家に伝来した算用帳(以下、決算帳簿と呼ぶ)の分析によって大名組による工事費決算の仕組みが明らかにされてきた(木越2012a)。また、大坂城普請丁場割絵図16点の比較検討により、絵図の系統分類、各絵図の伝来経緯、記載内容の精度についての検討も行われている(木越2021b)。

木越による丁場割絵図の分類は、全3期のうち1期単独の

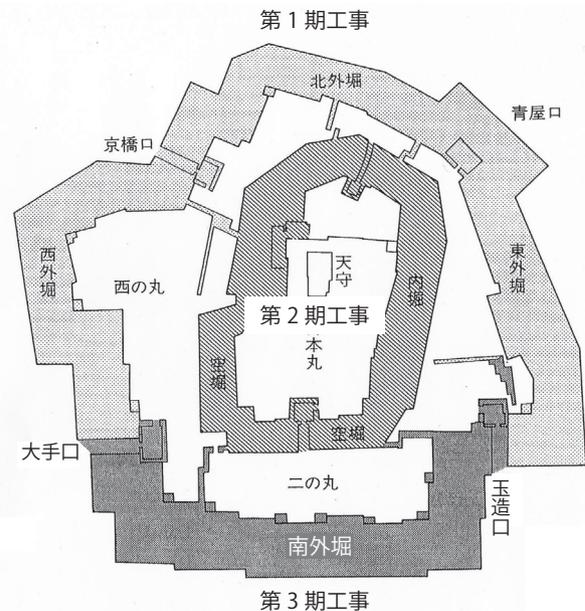


図1 徳川期大坂城普請の時期別工区

ものを甲類、第1~3期全体をまとめたものを乙類とする。甲類図は第1期が「大坂御城御普請二付而諸大名江地口坪割之図」(毛利家文庫)、第2期が「大坂御城図」(蓬左文庫)の各1葉が知られている。第3期は担当大名の全体像が分かる丁場割絵図は知られていない<sup>(1)</sup>。全3期分を編纂作成した乙類図は、

記載内容等から乙A類(「大阪御城之図」国立国会図書館蔵など)と乙B類(「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」大阪市役所旧蔵など)の2系統に分類される(木越2012b)。

## 2. 問題の所在

乙A類にあたる「大阪御城之図」(国立国会図書館蔵)は、岡藩中川家に伝来したものが、明治以降文部省に移管されたもので、確実に江戸時代にさかのぼる編纂絵図として貴重である(木越2012b)。木越は乙類の丁場割絵図の精度について、当該工事の決算帳簿(蜂須賀家文書・国文学研究資料館蔵)との比較から、「地口寸法の多くが乙A類図の地口寸法と一致しており、乙A類図の精度の良さを裏付けている」(木越2012a)とした。ここでいう決算帳簿とは、寛永5年8月15日付「寛永五年大坂二ノ丸南輪御石垣坪ノ御帳」(仮決算)、寛永5年10月20日付「寛永五年大坂御二ノ丸南輪本御石垣・水敲御石垣坪数指引ノ御帳」(本決算<sup>(2)</sup>)の2つを指す。乙A類図は「決算帳簿にもとづいて作成された信頼の置ける丁場割図」、「転写過程での若干の齟齬はあるものの、当初このようなデータを集約できたのは幕府しかなく、乙A類図は幕府作成とみてよからう」と評価した。

木越による徳川期大坂城普請に係る一連の研究は、割普請や組普請を特徴とする公儀普請の労働編成や役負担の実像理解を大きく進展させただけでなく、これまで安易に利用してきた「大坂城普請丁場割之図(竹内勇吉写図)」等の丁場割絵図に対しても十分な史料批判が必要なことを明らかにした。

木越は乙A類「大阪御城之図」の精度の高さを、決算帳簿(本決算)の地口寸法と比較して、池田組では寸尺まで一致したのが11大名(58%)、尺以下で誤記や齟齬が起きていたのは7大名、水敲では76~90%の高い一致率をみたことをその証左とした。また、「大阪御城之図」と乙B類「摂州大坂之御城普請丁場之図」(前田育徳会蔵)の比較では、後者の数値が前者に対して齟齬のあるものが多々あり、その他の乙B類絵図とあわせ総じて精度が劣るといった評価を下している。

しかし、この一致率が高いと評価できるかは比較材料が限られており不透明である。そこで本稿では「大阪御城之図」と決算帳簿(仮決算・本決算)にみられる地口寸法を再度比較しながら、別の乙B類図「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」(大阪市役所旧蔵、原本行方不明)も引用して対比を行う。また「C表 3期普請丁場割大名一覧」(木越2012b)には

誤記が散見されたので、これらの点を再検討することで乙A類「大阪御城之図」記載内容の精度について検証していきたい。

## 3. 丁場割絵図と大名決算帳簿による地口寸法の比較

### (1) 検討方法

第3期工事で南外堀の本石垣、水敲石垣、東西土橋石垣について、大名毎の地口寸法を表1にまとめた。壁面番号は[村川1962]によった(図2)。地口寸法の読み取りは「大阪御城之図」は『城郭石垣の技術と組織』(金沢城調査研究所編)掲載の拡大写真、「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」は『大日本史料』第12編33の附図(図3)を用いた。

大名決算帳簿は全参加大名の負担坪数や地口寸法、金高・反高等が記載された仮決算帳簿、寛永5年8月15日付「寛永五年大坂二ノ丸南輪御石垣坪ノ御帳」(蜂須賀家文書)を基礎とした。これに「関連史料」として、下記に記載された地口寸法を併記して数値の検証を行った<sup>(3)</sup>。

- ① 前田利常組は寛永5年8月13日付「寛永五年大坂御二ノ丸南輪御普請惣目録帳」(加越能文庫)『金沢石垣構築技術史料1』(石川県金沢城調査研究所)
  - ② 黒田長政組は寛永5年8月13日付「寛永五年辰大坂御城南輪御普請御石垣坪数算用帳」(慶長年中ノ寛永年中迄御城廻御普請御手伝御務之趣公儀江被仰出候記録、毛利家文庫)『大坂城再築関係史料』(大阪市史編纂所)
  - ③ 池田光政組は本決算帳簿である寛永5年10月20日付「寛永五年大坂御二ノ丸南輪本御石垣・水敲御石垣坪数指引ノ御帳」(蜂須賀家文書・国文学研究資料館蔵)
- 第3期工事では本決算にあたり普請役高に対する石垣工事(本石垣・水敲石垣・矢倉台石垣・両仕切石垣・その他)の清算方法に変更があった(木越2012a)が、仮決算の8月段階で

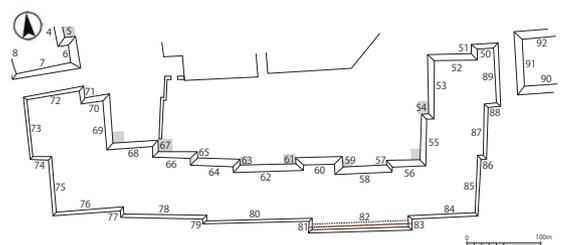


図2 大坂城南外堀の壁面番号(村川1962をもとに作成)

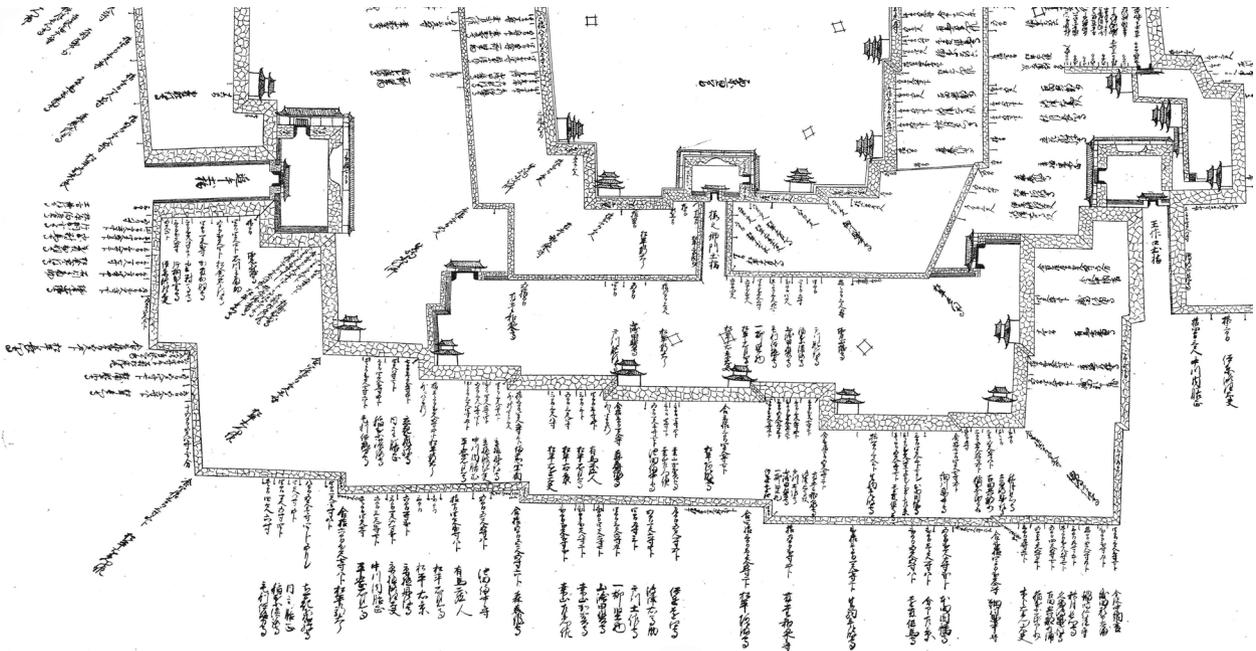


図3 大坂御城之絵図并石垣丁場之書付(一部抜粋、『大日本史料』12-33)

出来していた本石垣・水敲石垣の築坪や地口寸法が本決算に踏襲されている。したがって両者の比較により誤記の有無とその程度が確認できる。

地口寸法の正誤は、蜂須賀家文書の仮決算帳簿を用い、地口寸法と反高から石垣坪数を算定し、記載された「築坪」と数値が合致しているかにより判定した<sup>(4)</sup>。表1で太字としたものが妥当性の高い数値である。

前田家や毛利家が写した黒田組の決算帳簿(家老の毛利伊豆が所持)は、組頭大名4組の下奉行たちが連署しており、お互いに承認しあったものである。大名家にとっては公式の帳簿でありその数値は信頼性が高いはずである。蜂須賀家の決算帳簿では自身の下奉行の署名とともに組頭であった池田光政家の下奉行が連署している。工事の実数量を示す資料はおそらく幕府普請方が作成したとみられるが、写しを重ねていく過程で誤記が生じた可能性が高い。表1をみてわかる通り、地口寸法の数値には一定の共通性がある一方で、尺寸分厘の桁に微妙な違いがあるのも事実である。相互に署名はするものの坪数積算の根拠になった地口寸法までの細かいチェックはしていないことがわかる。

## (2) 算用帳記載数値の信頼性

蜂須賀家文書において仮決算と本決算の地口寸法が完全に一致するのは30例中23例でその割合は76.7%となる。その他の7例のうち数値が1字違い、あるいは一桁ずれているものが5例、寸・分の桁で2文字違っているのが1例であった。

誤記の仕方や割合の目安とみておきたい<sup>(5)</sup>。次いで、8月の仮決算帳簿同士で比較すると、蜂須賀家と前田家の資料では5例すべてが完全一致していた。蜂須賀家と黒田組の帳簿では36例中、完全一致が24例、66.7%、残り12例はいずれも1文字違いか1桁違いのいずれかであった。

地口寸法に対して築坪はどうであろうか。蜂須賀家文書の仮決算と本決算では複数の大名家を合算した項目を除くと、15例中11例が完全一致し、尺寸の桁に軽微な違いがあるものが3例、もう1例は尺寸に2つの違いがあった。伊達遠江守の仮決算では地口4尺2寸2分、築坪77坪9分1厘<sup>(6)</sup>となっているが、本決算では地口4尺2寸2分8厘、築坪77坪3分9厘と正しい算用が行われており、仮決算簿を単に引き写したものでないことが示唆される。



図4 石垣坪ノ御帳と指引ノ御帳(蜂須賀家文書)

蜂須賀家と毛利家の仮決算帳簿では築坪36例中、完全一致が32例、88.9%、残る4例は尺寸以下が1字違いであった。なかでも本石垣22例はすべて完全一致していた。

このように大名家の下奉行らが作成した帳簿はある共通のデータをもとにしているとみてよい。それでも2~3割程度の誤記を含むこと、それは1字違いあるいは1桁違いのような軽微なミスだったことがわかる。

### (3) 普請丁場割絵図と算用帳の数値

乙A類図「大阪御城之図」と蜂須賀家文書決算帳簿(仮決算)の地口寸法が完全に一致したのは113例中、53例であり、一致率は46.9%であった。これは木越が蜂須賀家文書の決算帳簿の「地口寸法の多くが乙A類図の地口寸法と一致して」という認識と齟齬をきたしている。数値の1字違いあるいは1桁違いは34例、30.0%あった。上記データを参照すると誤記は多すぎるとは言えない。両者をあわせると87例、77.0%となる。しかし、まったく数字の異なる項目もあるように、当該帳簿以外の参照も考慮されなければならない。また、決算帳簿では、地口寸法で分・厘の桁が0であるのに、ここに0以外の数値の入っている例が「大阪御城之図」では4項目ある。原資料にない数字を付加することは単なる読み間違いとは言い難いので、同図の参照した帳簿は蜂須賀家のそれとも微妙に違ってたと推測できる。

### (4) 2つの丁場割絵図の地口寸法

ここでは妥当性が高いと判断した地口寸法(表1太字)と乙A類図「大阪御城之図」(141×141cm)、乙B類「大阪御城之図併石垣丁場之書付」(143×142.6cm)の合致状況を比較してみたい。両図の完全一致(土橋北を除く)は前者が59例、後者が65例で、ほぼ同等か、やや後者が優位にある。なお、表1には木越が乙B類図として引用した前田家伝来の「寛永五年摂州大坂之御城普請丁場之図」も掲載した。ここでは完全一致は45例と最も少ない。乙B類の2点の絵図では一致する項目数が75例、不一致のうち一字違い、同数値で1桁ずれたものが25例、他3例と、両絵図の近縁性を示している<sup>(7)</sup>。

以上のように地口寸法の数値だけをみると必ずしも「大阪御城之図」の記載内容が良い(木越2012a)と言えるわけではない。大名丁場名の記載は前者では大手土橋の北で小出対馬守を欠いているが、全体としては後者よりも整っていることは間違いない。

## 4. 考察

### (1) 算用帳

寛永5年の大坂城普請に参加した大名家では組頭大名家の下奉行が作成し、相互に署名した公式帳簿を、さらに組内の大名家が書写していった(木越2012a)。蜂須賀家では第3期工事に係る「大坂御普請之御帳」全9冊が『忠英様御代寛永年中大坂御普請之帳』として伝来した。このうち寛永5年の年記をもつ下記算用帳7冊にはいずれも巻末に池田光政家の下奉行の署名・花押があり、竣工後まもなく現地で作成されたものとみられる。

- ① 大坂御普請時四組御拝領被成大石栗石御帳 18枚
- ② 大坂御二ノ丸南輪御石垣坪ノ御帳 110枚
- ③ 大坂御二ノ丸南輪御普請土坪ノ御帳 27枚
- ④ 大坂御二ノ丸南輪御普請之時万日用銀四組割符帳 107枚
- ⑤ 大坂御二ノ丸南輪御普請之時万栗石割符之御帳 27枚
- ⑥ 大坂御二ノ丸南輪御普請諸々割符 御自分御当前ノ御目録 6枚
- ⑦ 大坂御二ノ丸南輪本御石垣・水敲御石垣坪数指引ノ御帳 33枚

上記7冊の全紙数は328枚にもおよぶ。石垣工事(本石垣、水敲、矢倉台、中仕切、裏石垣等)では地口寸法、金高・反高といった基礎データだけでなく、片入角(出角・入角部に付随する三角形部分)や込坪(割増分)の計算、水敲以下の本石垣坪への換算といった計算が伴う。石工事6種(狭間石、雁木石、土留石垣、水路工事、青屋口上ケ石垣、青屋口ノ葛石)では施工間数を本石垣に換算する計算、土工事5種(本石垣の根切、水敲の根切、堀の土坪、下ケ地形ノ退土坪、前後ノ退土坪)の土坪数の計算など、膨大な実数とその内訳が記載されていた。このような複雑な会計処理は、各大名家の役高と一定の負担基準により定められた各工事の当り高と工事実績との調整、日用普請や追加工事の割符など、多種多様な工事を「役負担の公平性」の原則を貫徹するためにはどうしても必要な業務だった。

各帳簿の大名家の記載順は蜂須賀家文書の②石垣坪や③土坪の仮決算では組頭大名を筆頭に各組内の小割を記載する<sup>(8)</sup>のに対し、本決算に係る④や⑤、⑦では自分(松平阿波守)を筆頭に編成し直している。毛利家文庫の石垣坪の仮決算書でも自分(毛利長門守)を筆頭とし、組頭の「松平右衛門佐」は末尾に置いている。

仮決算書で各大名家の石垣坪を計算するための一つ書きの

項目数や記載様式は蜂須賀家と毛利家の帳簿では共通しており、原本となった史料の存在を裏付ける。一方で、石工事の項目の記載方法が、蜂須賀家では「段石」「青屋口葛石」とするのに対して、毛利家では「かんき(雁木)石」「かつら石」とし、前者では末尾の総石垣坪の記載に「合八口」のように項目数を入れるのに対して、後者では単に「合」とする、「反入テ」と「反共」の違いなど<sup>(9)</sup>、表現には若干の差異があって、大名家によるアレンジが認められる。基準数や計算値は変えないものの、単に原本をコピーするような書写ではない。

前章での検討から、諸大名家の下奉行らが作成した帳簿はある共通のデータをもとにしているとみてよい。南外堀の本石垣には不定の間隔で「間数刻印」が打たれており(藤井1977)、地口寸法や高さは現地での実測値であろう。幕府普請奉行の検査のもとで作成された仮決算書の原簿に基づいて、組頭大名家から組中大名家へ、8月13日～15日前後の短期間のうちに2度にわたって書写されていたものと考えられる。

それゆえか、地口寸法には1字違いあるいは桁違いのような軽微なミスが2～3割生じていた。これに対して本石垣や水敵石垣の築坪は約9割の合致率であり、非合致の場合でも分厘以下の軽微なものだった。蜂須賀家文書の⑦本決算帳簿にあるように最終的には当り高に対する各大名家負担の過上・未進の清算は坪数によって行われたのであり、築坪がより重要な数値と言える。その根拠となった地口寸法や反高、計算の当否まで遡って検証することはなかったであろう。

## (2) 普請丁場割絵図記載の地口寸法の精度

大坂城の普請丁場割絵図には各時期の工事計画あるいは指図である甲類図と3期分をまとめて全丁場割を記載した乙類図がある(木越2012b)。後者は寛永5年の第3期竣工後に編纂された絵図ということになる。

木越が乙A類図「大阪御城之図」の精度の良さを、蜂須賀家等の決算帳簿の地口寸法との一致を根拠としている(木越2021a)が、前章で検討したように仮決算帳簿との完全一致率は5割未満であり、軽微な違い、誤記の可能性のあるものを含めても77%にとどまった。この不一致の多さは「大阪御城之図」が典拠とした決算帳簿の精度とその際の誤記に由来する。この丁場割絵図が幕末まで伝来した中川家は、蜂須賀家と同じ池田光政組であり、本稿で検討した蜂須賀家文書と同質のものを所持したはずである。しかし、絵図が作

成された年代や場所については不明な点が多く、これ以上の追求は差し控えたい。

もう一点は、乙A類図と乙B類図の記載内容の精度の問題である。本稿で取り上げた乙B類「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」は地口寸法だけを取ってみると、「大阪御城之図」と同等のものであり、「大阪御城之図」記載がとりわけ精度が高いとは言えない。乙B類図のうち「寛永五年摂州大坂之御城普請丁場之図」は「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」と描画や記載内容に共通点は多いものの、細部で省略傾向がみられ、地口寸法では誤記をより多く含んだものであった。

「大阪御城之図」は丁場大名名と地口寸法を引き出し線で結ぶ。絵図は本丸・二ノ丸の石垣や中仕切背後にあった雁木を表現し、櫓台は建物を描かない代わりに地口寸法を書き入れる。大手門枡形には鏡石である見付石を描いている(本丸の桜門の蛸石は描かない)。大名名や地口間数以外の諸寸法や文字情報は「大阪御城之図」の方が格段に豊富で優れている。

なお、「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」にはほかの乙B類図にはない大手見付石の表現がみられる。詳細な検討には至っていないが、乙B類図のなかでは文字・数字情報においても「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」が相対的に優れたものといえよう。

## (3) 大坂城普請丁場割絵図乙類図の性格

公儀の城普請に関する情報は江戸期においては極秘事項に類するものであった。萩藩毛利家の「慶長年中より寛永年中迄御城廻御普請御手伝御務之趣公儀江被仰出候記録」は享保7年(1722)に幕府から慶長～寛永期の公儀普請にかかる資料の提出を求められた際の、国元と江戸の往復書類の一部であった(木越2012b)。木越が言うように幕府の機密事項に該当する公儀城郭普請の詳細な絵図を所持し、それが露見することは大名家にとっては不都合なことだっただろう。

一方で、慶長以来度重なる公儀普請への参加を余儀なくされた大名家では、その都度奉行が派遣され、諸経費の出納に関わる帳簿が作成されたはずである。役高を基準とした割普請が負担の公平性という原則のもと、大名組と家中組という重層的な組編成によって遂行されたていったのが徳川期大坂城普請であった。それを示すのが工事費の決算に係る膨大な算用帳である。諸大名家にとってはこれが公儀

普請出役に関する公式記録であった。寛永5年の大坂城普請以降は、寛永13年の江戸城外堀普請、万治元年の江戸城普請を最後に、石垣普請を伴う大規模な公儀普請は途絶えた。

乙類絵図は3期分の事業を総括した後世の編纂絵図である。編纂の契機としては、幕府にとっては享保7年の調べのように公儀普請の歴史を記録、編纂することが目的としてあげられるが、大名家にとっては幕府への貢献や当時活躍した家老や奉行たちの働きを顕彰する意味もあったと考えられる。17世紀後半～18世紀になると、全国の城下町が都市建設に沸いた往時の喧騒と活気を思慕する思いもあったかもしれない。

普請丁場割絵図(乙類図)は2つの情報ソースからなる。一つは城郭の縄張り(平面プラン、石垣等、水堀)や建築に係る情報であり、もう一つは丁場境や担当大名、地口寸法等に関する情報である。各大名家では居城の修理の際には国元や江戸で修補願絵図を作成しており、前者は入手した原図をもとに藩お抱えの絵師等が作図・描画したとみられる。これに大名家で所持している決算帳簿の情報を書き込むことによって丁場割絵図は完成する。実際には、乙B類図の類似度から良質な絵図を大名家間あるいは家中で借用してまると模写したと考えられる。

寛永5年当時、幕府や諸大名にとって3期分をまとめた竣工図としての丁場割図の必要性は乏しかった。乙類図は、後世に過去を記録し、記念、称揚するために編纂された史料であろう。乙A類「大阪御城之図」では南外堀水敲81号壁が描かれないにもかかわらず、松平阿波守丁場には「合四十三間」の注記がなされる。地口寸法記入者は不自然に思ったはずである。しかし、乙類図編纂の目的が如上のように捉えられるのならば、地口寸法等の異同はさしたる問題ではなかった。このような編纂の経緯が書写の過程で誤記を多発する要因にもなったのではなからうか。

## 5. まとめ

本稿では寛永5年の大坂城第3期工事の実態を示す史料として活用されている「普請丁場割絵図」の記載内容を蜂須賀家文書等の大名家決算帳簿と突き合わせ、石垣の地口寸法と反高から求めた数値と記載された築坪を照合する方法によってその精度等について再検討を行った。

その結果、地口寸法の記載は大名家決算帳簿書写の過程ですでに2～3割の誤記が生じているのに対し、築坪は9割前後の一致率であった。地口寸法と普請丁場割絵図3葉との比

較では、絵図転写の過程で誤記が増幅され、実際の地口寸法との一致は約5～6割と目された。良質の丁場割絵図と評価されてきた乙A類「大阪御城之図」は、地口寸法では乙B類に対してとりわけ精度が高いわけではないことを確認した。

このことは、乙類の丁場割絵図が竣工図として工事の実態を正しく伝えることを目的として編纂されたものではなく、享保年間の幕府の調べが示すように、天下をあげた大規模プロジェクトを後世に記録、記念、顕彰することを目的に編纂された史料という性格に起因すると考えた。公儀普請の役負担の実績としては各大名家でそれぞれ蜂須賀家のような一連の決算帳簿を伝えていたのであろう。今後、各絵図作成の経緯や成立年代の検討を行うことが必要となる。

最後に、今回の地口寸法の再検討から第3期工事の丁場割図を作成してみた(図5)。人が細かな数値を書写する過程で誤記は避けられない。決算帳簿の読み直しと合わせて今後とも精度を高めていきたい。

## 注

- (1) 佐藤恭敏家文書所収の第3期工事の計画絵図には隅角部のみについて担当大名を描いたものがある(春日市教育委員会2005)。
- (2) 本決算に係る史料には11月23日付「万日用銀四組割符帳」、11月24日付「万栗石割符之御帳」、11月25日付「諸々割符御自分御前ノ御目録」がある。
- (3) ①と②は原本を確認したわけではないので翻刻時の記載ミスを含む可能性は否定できない。
- (4) 玉造土橋際の前田利常丁場(50～53、89、91号壁)は決算帳簿の築坪に片入角と割増し分の込坪(1割5分)が含まれており、地口寸法との検証ができなかった。有馬豊氏、京極忠高の丁場(53～55号壁)も同様に込坪(5分)と片入角の分が築坪に含まれている。「大阪御城之図」では、地口に7間4分と4間とあり、合計すると11間4分となり「合14間4分」の記載とあっていない。77～78号壁の出角を担当した毛利秀就丁場ではいずれの地口寸法とも築坪とは対応しなかったので判定不可とした。
- (5) 蜂須賀家文書、寛永5年11月23日付「万日用銀四組割符帳」は南外堀普請に伴う古石垣解体や堀の土工、水路工事等を民間発注した経費を参加大名毎に割符した帳簿である。ここに記載された日用銀の数値や計算は正確に記載されており、誤記とみられるのは1か所しか見つけられなかった。地口寸法等の記録とは大きな違いを感じる。

- (6) 計算上は77.16坪となる。地口寸法の間違ひというよりは計算ミスか誤記であろう。
- (7) 乙A類図と乙B類図の違いは、中村博司がいち早く注目した(中村1986)ように南外堀の水敲80~84号壁の表現が異なっている。乙A類図は81号壁の出角、入角を描かず、南岸を4面構成とするのに対し、乙B類図は小さく83号壁を描いて5面構成とする。後者では「大坂御城之絵図」石垣丁場之書付「大坂御城石垣御普請町場絵図」(山口県文書館蔵)が83号壁の折れを明確に表現するのに対し、前田家ゆかりの「寛永五年摂州大坂之御城普請丁場之図」およびこれを写した可能性が高い「大坂城攻丁場割附図」(大阪城天守閣蔵)では斜線2本でこれを表現している。ほかに、乙B類では杉原伯耆守の水敲丁場(土橋脇ノ片入角反坪)を73号壁に充てるのも共通している。乙A類には記載はない。
- (8) 蜂須賀家の②仮決算書では組頭を「松平新太郎自分」「松平右衛門佐自分」などと表記しており、組頭が作成した原本をそのまま引用した形となっている。
- (9) 前田家の帳簿では「本御石垣御仕切之上共ニ置申狭間石」「青屋口水敲ノ上葛石」「御二ノ丸御石垣後ノ土留」など詳細に記述する。蜂須賀家では右肩に簡略に「水敲」「西土橋南平」などと但し書きするのに対し、毛利家では築坪数の下に置き、続けて地口寸法や高さを記載する。

- 坂城再築と東六甲の石切場』ヒストリア別冊 大阪歴史学会
- ・中村博司2018『大坂城全史』ちくま新書
  - ・松岡利郎1988『大坂城の歴史と構造』名著出版
  - ・村川行弘1962『大坂城と芦屋』芦屋市文化財調査報告書第2集
  - ・村川行弘1970『大坂城の謎』学生社
  - ・渡辺武1989「徳川幕府の大坂城再築」『新修大阪市史』第3巻  
大阪市

#### 引用・参考文献

- ・石川県金沢城調査研究所2012『城郭石垣の技術と組織』
- ・内田九州男1982「徳川期大坂城再築工事の経過について」『大坂城の諸研究』名著出版
- ・岡本良一1970『大坂城』岩波新書
- ・小野清1890『大坂城誌』(名著出版復刻1973)
- ・春日市教育委員会2005『佐藤恭敏家文書調査報告書』(春日市古文書調査報告書 第1集)
- ・木越隆三2012a「徳川期大坂城石垣普請の造営組織と大名組の役割」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
- ・木越隆三2012b「徳川期大坂城普請丁場割図の分類と特徴」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
- ・北野博司2012「大坂城再築における石垣普請の組織と技術」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
- ・中村博司1986「徳川時代大坂城普請参加大名の編成について」『大阪城天守閣紀要』第14号
- ・中村博司2008『天下統一の城 大坂城』新泉社
- ・中村博司2009「大坂城再築の経過と普請参加大名の編成」『大

表1 徳川期大坂城第3期工事における大名丁場の地口寸法と築坪

石垣の位置	壁面 番号	担当大名			地口寸法 [間・尺寸分厘]						築坪 [坪・分厘モ]		備考
		組	表記名	氏名	算用帳		丁場割絵図				算用帳		
					大坂御二ノ丸南 輪御石垣坪ノ御 帳(仮決算)	※関連史料	A 大坂御城之図	B 大坂御城之繪 図并石垣丁場之 書付	C 寛永五年撰州 大坂之御城普請 丁場之図	大坂御二ノ丸南 輪御石垣坪ノ御 帳(仮決算)	※関連史料		
1 本石垣東、土橋	50~53 89、91	1	金沢中納言	前田利常	133.4500	133.4500	139.1560	139.2560	139.2560	3016.580	3016.950	築坪に片入角・込坪1割5分を含む	
2 本石垣東	53	1	織田河内守	織田長則	1.0510	1.0510	0.4640	0.4640	0.4640	20.530	20.530	込坪5分	
3 本石垣東	53~54	1	有馬蕃允	有馬豊氏	14.0000	14.0000	14.0040	14.0000	-	295.540	295.530	築坪に片入角・込坪5分含む	
4 本石垣東	55	1	京極若狭守	京極忠高	10.2960	10.2960	10.2960	10.2960	10.2560	232.440	232.480	築坪に片入角・込坪5分含む	
5 本石垣東	55	2	織田刑部大輔	織田信則	5.4730		5.4730	5.4730	5.4730	101.770			
6 本石垣東南	55~56	2	鍋嶋信濃守	鍋嶋勝茂	26.5300		26.5400	26.5300	26.5300	472.900		26.537か	
7 本石垣南	56	2	秋月長門守	秋月種春	2.0900		2.9000	2.0000	2.0000	37.800			
8 本石垣南	56	2	来嶋越後守	来嶋通春	1.0000		1.0000	1.0000	1.0000	17.580			
9 本石垣南	56	2	古田兵部少輔	古田重恒	3.5800		3.5550	3.5580	3.5580	69.100			
10 本石垣南	56	2	稲葉民部少輔	稲葉一通	3.3500		3.1570	3.5550	3.5550	63.150		3.355か	
11 本石垣南	56	2	木下右衛門大夫木下延俊		2.0900		2.0900	2.0900	2.0900	37.800			
12 本石垣南	57~58	2	細川越中守	細川忠利	14.4750		14.4750	17.4750	17.4750	260.090			
13 本石垣南	58	2	本多因幡守	本多政武	3.4040		3.4307	3.4307	3.4037	64.580			
14 本石垣南	58	2	分部左京亮	分部光信	1.2810		1.2815	1.2815	1.2815	25.820			
15 本石垣南	58	2	遠藤但馬守	遠藤慶隆	1.5770		1.5770	1.5770	1.5770	34.490			
16 本石垣南	58	2	生駒孝岐守	生駒高俊	11.3020		11.3030	11.3030	11.3030	202.260			
17 本石垣南	58~59	2	藤堂和泉守	藤堂高虎	20.5720		20.5700	20.5720	20.5720	370.240			
18 本石垣南	60	2	嶋津右馬頭	嶋津忠興	3.2780		3.2780	3.2720	3.2720	61.200			
19 本石垣南	60	3	戸川土佐守	戸川達安	3.3350	3.3350	3.1350	3.3350	3.3380	62.870	62.870		
20 本石垣南	60	3	山崎甲斐守	山崎家治	2.2260	2.2260	2.2260	2.2260	2.2260	41.990	41.990		
21 本石垣南	60	3	一柳監物	一柳直盛	3.5730	3.5730	3.5730	3.5730	3.5730	69.880	69.880		
22 本石垣南	60	3	伊達遠江守	伊達秀宗	4.2200	4.2280	4.2280	4.2280	4.2280	77.910	77.390		
23 本石垣南	61~62	3	松平阿波守	蜂須賀忠英	33.4770	33.4770	33.4770	33.4770	33.5770	597.160	597.160		
24 本石垣南	62	3	桑山左衛門守	桑山一直	2.0410	2.0410	2.0400	2.0410	2.0450	36.350	36.350	B絵図では桑山2名の配置が逆転	
25 本石垣南	62	3	桑山加賀守	桑山貞晴	2.0460	2.0450	2.0460	2.0450	2.0410	36.860	36.660	C絵図では桑山2名の坪数が逆転	
26 本石垣南	62	3	池田備中守	池田長幸	5.1170	5.1170	5.1700	5.1170	5.1070	91.340	91.340		
27 本石垣南	62~63	3	森美作守	森忠政	17.1300	17.1300	17.1000	17.1300	17.2600	302.720	302.760	A絵図の根に13間1尺3寸	
28 本石垣南	64	3	有馬蔵人	有馬康純	4.0150	4.0150	4.1050	4.0150	4.0150	70.770	70.770		
29 本石垣南	64	3	松平石見守	池田輝澄	3.0030	3.0030	3.0030	3.0030	3.0030	53.100	53.100		
30 本石垣南	64	3	松平右京大夫	池田政綱	5.3400	5.3400	5.3500	5.3400	5.3800	98.360	98.360		
31 本石垣南	64	3	松平右近大夫	池田輝興	3.3800	3.3800	3.3800	3.3800	3.3800	64.200	64.200		
32 本石垣南	64~65	3	備前宰相	池田忠雄	18.1630	18.1620	18.1620	18.1630	14.7230	322.880	322.830	B絵図は4間3尺足さず	
33 本石垣南	66	3	京極丹後守	京極高広	7.2520	4.3880	4.3880	4.3880	4.3880	130.460	111.020	仮決算で京極家合算	
34 本石垣南	66	3	京極修理大夫	京極高三		2.4640	2.4640	2.4640	2.4640		48.760		
35 本石垣南	66	3	中川内膳正	中川久盛	5.3440	5.3440	5.3440	5.3440	5.3440	97.990	97.990		
36 本石垣南	66	3	平岡石見守	平岡親資	1.3490		1.3490	1.3490	1.3490	28.390			
37 本石垣南	66~67	3	松平新太郎	池田光政	19.3540	21.0040	19.2910	19.2550	19.2520	341.520	369.360	本決算で松平新太郎と合算	
38 本石垣南	68	3	立花飛騨守	立花宗茂	7.1478		7.1960	7.1960	7.1960	125.650		本決算で立花家合算	
39 本石垣南	68	3	立花主膳正	立花種次	0.4968	8.0406	4.0850	0.4870	0.4870	14.200	139.570		
40 本石垣南	68	3	稲葉淡路守	稲葉紀通	3.4250	欠	3.4450	3.4250	3.4250	63.600		- 本決算に数値を欠く	
41 本石垣南	68	3	毛利伊勢守	毛利高政	1.2760	欠	1.6760	1.2760	1.2760	25.040		- 本決算に数値を欠く	
42 本石垣南西	68~69	4	松平右衛門佐	黒田長政	40.3380	40.3080	40.3080	40.3100	40.3100	697.550	697.550	土方丹後込坪	
43 本石垣西	69	4	松浦肥前守	松浦隆信	5.0560	5.0560	5.0560	5.0660	5.0660	87.662	87.662	土方丹後込坪	
44 本石垣西	69	4	大村松千代	大村純頼	4.3400	4.3400	4.3040	4.3040	4.3040	77.586	77.586	土方丹後込坪	
45 本石垣西	69~70	4	寺澤志摩守	寺澤広高	2.3470	2.3470	2.3480	2.3440	2.3440	43.400	43.400		
46 本石垣西	70	4	杉原伯耆守	杉原長房	2.1240	2.1240	7.1240	2.1240	2.1240	39.120	39.120	寺澤志摩込坪	
47 本石垣西	70~71	4	松平長門守	毛利秀就	22.0260	22.2260	22.2260	22.2660	22.3660	364.720	364.720	判定不可	
48 大手土橋南	72	4	堀尾山城守	堀尾忠晴	10.0000	10.0000	10.0000	10.0000	10.0000	145.330	145.330		
49 大手土橋南	72	4	石川主殿頭	石川忠総	0.4300	4.4300	4.4040	4.4040	4.4040	66.923	66.923	土方丹後込坪	
50 大手土橋南	72	4	松倉豊後守	松倉重政	5.2640	5.2640	5.2640	5.2040	5.2040	75.700	75.700		
51 大手土橋南	72	4	加藤出羽守	加藤泰興	4.1200	4.1200	4.1100	4.1200	4.2200	56.820	56.820		
52 大手土橋南	72	4	小出対馬守	小出吉親	2.2830	2.2830	2.2800	2.2830	2.2830	32.840	32.840		
53 大手土橋南	72	4	片桐出雲守	片桐孝利	3.2500	3.2500	3.2500	3.2500	3.3500	44.660	44.660		
54 大手土橋南	72	4	伊東修理大夫	伊東祐慶	4.0920	4.0920	4.0530	0.5060	0.5600	10.920	10.920	0.5085か	
55 大手土橋北	7	4	堀尾山城守	堀尾忠晴	14.2590	14.3590	10.0000	-	-	73.000	73.000	B・C絵図記載なし	
56 大手土橋北	7	4	石川主殿頭	石川忠総	4.0040	0.4040	4.4040	-	-	23.320	23.320	4.400か //	
57 大手土橋北	7	4	松倉豊後守	松倉重政	5.2640	5.2640	5.2640	-	-	44.330	44.330	//	
58 大手土橋北	7	4	加藤出羽守	加藤泰興	4.1200	4.1200	4.1100	-	-	33.690	33.690	//	
59 大手土橋北	7	4	小出対馬守	小出吉親	2.0830	2.2830	-	-	-	12.260	12.260	A絵図では欠落、//	
60 大手土橋北	7	4	片桐出雲守	片桐孝利	3.2500	3.2500	3.2500	-	-	17.100	17.100	//	
61 大手土橋北	7	4	伊東修理大夫	伊東祐慶	7.2730	7.2730	7.2730	-	-	37.280	37.280	//	
62 大手土橋北	7	4	土方丹後守	土方雄氏	0.0400	0.2400	0.2450	-	-	6.200	6.200	//	
63 土橋北~水敲	7、8	4	杉原伯耆守	杉原長房	-	-	-	5.0800	5.0800	10.300	10.300	水敲土橋脇片入角、BC絵図は水敲西	
64 水敲北	8	4	土方丹後守	土方雄氏	0.4000	0.4000	-	-	-	1.680	1.680	上部築直し	

石垣の位置	壁面番号	担当大名			地口寸法 [間・尺寸分厘]						築 坪 [坪・分厘毛]		備 考	
		組	表記名	氏名	算用帳		丁場割絵図			算用帳				
					大坂御二ノ丸南輪御石垣坪ノ御帳(仮決算)	※関連史料	A 大坂御城之図	B 大坂御城之絵図并石垣丁場之書付	C 寛永五年摂州大坂之御城普請丁場之図	大坂御二ノ丸南輪御石垣坪ノ御帳(仮決算)	※関連史料			
65	水敲西	73	4	土方丹後守	土方雄氏	3.0000	3.0000	3.0000	3.0000	3.0000	3.0000	38.700	38.700	
66	水敲西	73	4	片桐出雲守	片桐孝利	1.2245	1.2245	1.2245	1.2240	1.2240	17.808	17.088		
67	水敲西	73	4	小出対馬守	小出吉親	1.4620	1.4620	1.4620	1.4620	1.4520	18.850	18.850		
68	水敲西	73	4	加藤出羽守	加藤泰興	3.2120	3.3120	3.3150	3.3120	1.2120	37.490	37.499		
69	水敲西	73	4	松倉豊後守	松倉重政	3.4700	3.1700	3.1700	3.1700	2.1700	34.970	34.970		
70	水敲西	73	4	石川主殿頭	石川忠総	3.2450	3.2450	3.2450	3.2450	2.2450	36.200	36.300		
71	水敲西	73	4	堀尾山城守	堀尾忠晴	9.2270	9.2270	9.2250	9.2270	9.2270	101.710	101.710		
72	水敲西	73	4	伊東修理大夫	伊東祐慶	0.2698	0.1698	0.1380	—	—	3.075	3.015		
73	水敲西	73~74	4	松平長門守	毛利秀就	22.3015	22.3015	22.5095	22.5900	22.5900	240.080	240.080		
74	水敲西	74~75	4	寺澤志摩守	寺澤弘高	8.0000	8.0000	8.0000	8.0000	8.0000	85.400	85.400		
75	水敲西	75	4	大村松千代	大村純頼	5.1430	5.1460	5.1430	5.0430	5.4030	55.780	37.190		
76	水敲西	75	4	松浦肥前守	松浦隆信	5.5470	5.5470	5.5450	5.5470	8.5470	62.960	62.960		
77	水敲西	75	4	松平長門守	毛利秀就	6.5685	6.5685	6.5685	6.5680	6.5680	314.060	314.060		
78	水敲西南	75~76	4	松平右衛門佐	黒田長政	43.0355	43.0360	43.0550	43.0350	43.0350	458.990	458.590		
79	水敲南	76	3	毛利伊勢守	毛利高政	1.4062	1.4062	1.4062	1.4600	1.4600	17.860			
80	水敲南	76	3	稲葉淡路守	稲葉紀通	4.1540	4.1540	4.1550	4.1540	4.1540	45.330			
81	水敲南	76	3	立花主膳正	立花種次	5.0352		0.4850	0.4850	0.4850	9.495		0.5350か0.5352	
82	水敲南	76	3	立花飛騨守	立花宗茂	8.4644	9.3995	8.5145	8.5145	8.5145	93.440			
83	水敲南	77~78	3	松平新太郎	池田光政	16.4700		16.4710	16.2780	16.2780	178.240			
84	水敲南	78	3	平岡石見守	平岡頼資	1.4700	18.3400	1.4700	1.4700	1.0470	18.990			
85	水敲南	78	3	中川内膳正	中川久盛	6.3520	6.3470	6.3470	6.3470	6.3470	70.150			
86	水敲南	78	3	京極修理大夫	京極高三		3.1520	3.1520	3.1520	3.1520				
87	水敲南	78	3	京極丹後守	京極高次	9.1640	6.0120	6.0120	6.0120	6.0120	98.770			
88	水敲南	78	3	松平右京大夫	池田政綱	3.0000	3.0000	3.0000	3.0000	3.0000	31.000			
89	水敲南	78	3	松平石見守	池田輝澄	2.0000	2.0000	2.0000	2.0000	2.0000	21.300			
90	水敲南	78	3	有馬蔵人	有馬康純	10.4280	10.4280	10.4220	10.4280	10.4280	144.100			
91	水敲南	78	3	池田備中守	池田長幸	5.5580	5.5580	5.5580	5.5580	5.5580	63.160			
92	水敲南	78~79	3	森美作守	森忠政	15.5560	15.5560	13.4120	15.5560	15.5560	169.620			
93	水敲南	80	3	桑山左衛門佐	桑山一直	2.2220	2.2220	2.2220	2.2220	2.2020	25.240			
94	水敲南	80	3	桑山加賀守	桑山貞晴	2.2820	2.2820	2.2820	2.2820	2.2820	26.310			
95	水敲南	80	3	山崎甲斐守	山崎家治	2.4680	2.4680	2.4678	2.4670	2.4670	29.600		2.4678か2.4680	
96	水敲南	80	3	一柳監物	一柳直盛	4.2690	4.3690	4.3690	4.3690	4.3690	49.155			
97	水敲南	80	3	戸川土佐守	戸川達安	4.0934	4.0934	4.0934	4.0930	4.0930	44.260			
98	水敲南	80	2	嶋津右馬頭	嶋津忠興	5.1680	—	5.1530	5.1640	5.1640	56.230			
99	水敲南	80	3	伊達遠江守	伊達秀宗	9.5154	9.5150	9.5154	9.5150	9.5150	105.000			
100	水敲南	80~81	3	松平阿波守	蜂須賀忠英	43.1550	43.1550	43.1526	43.1520	43.1520	460.700			
101	水敲南	82	2	嶋津右馬頭	嶋津忠興	2.0000		3.1640	21.9200	—	3.860		82号壁片入角築タン、織田刑部込坪	
102	水敲南	82	2	藤堂和泉守	藤堂高虎	19.2050		19.0250	19.0250	19.0290	222.790			
103	水敲南	82	2	生駒老岐守	生駒高俊	21.3720		21.3720	21.1720	21.1720	225.660		織田刑部込坪	
104	水敲南	82	2	遠藤但馬守	遠藤慶隆	2.5580		2.5580	2.5580	2.5580	30.480		織田刑部込坪	
105	水敲南	82	2	分部左京亮	分部光信	2.1180		2.1180	2.1180	2.1180	22.850		織田刑部込坪	
106	水敲南	82	2	本多因幡守	本多政武	5.2920		2.2920	5.2920	5.2920	38.600		織田刑部込坪	
107	水敲南	82~84	2	細川越中守	細川忠利	24.2600		24.2600	24.2600	24.2600	260.220			
108	水敲南	84	2	木下右衛門大木下延俊		3.0960		3.0960	3.0960	3.0960	32.850		織田刑部込坪	
109	水敲南	84	2	稲葉民部少輔	稲葉一通	5.1530		5.1530	5.1530	5.1530	54.620		織田刑部込坪	
110	水敲南	84	2	古田兵部少輔	古田重恒	5.4570		5.4570	5.4570	5.4530	59.870		織田刑部込坪	
111	水敲南	84	2	来嶋越後守	来嶋通春	1.2870		1.2870	1.2870	1.2870	15.370		織田刑部込坪	
112	水敲南	84	2	秋月長門守	秋月種春	3.0960		3.0960	3.0960	3.0960	32.850		織田刑部込坪	
113	水敲南	84	2	鍋嶋信濃守	鍋嶋勝茂	10.5190		10.5190	10.5190	10.5190	115.710			
114	水敲南	84	2	織田刑部大輔	織田信則	2.0290		2.0290	2.0290	2.0290	21.820			
115	水敲南	84	1	織田河内守	織田長則	—	—	0.3985	—	—	—			
116	水敲東	84~88	1	金沢中納言	前田利常	93.3400	93.3400	92.5777	4.3370	4.3370	1087.020	1087.020	込坪1割5分	

・ 関連史料の地口寸法は下記による。

1組：寛永五年大坂御二ノ丸南輪御普請惣目録帳(加越能文庫)『金沢城石垣構築技術史料1』石川県金沢城調査研究所

3組：寛永五年大坂御二ノ丸南輪本御石垣・水敲御石垣坪数指引ノ御帳(蜂須賀家文書)国文学研究資料館

4組：寛永五年辰大坂御城南輪御普請御石垣坪数算用帳(慶長年中寛永年中迄御城廻御普請御手伝御務之趣公儀江被仰出候記録、毛利家文庫)

『大坂城再築関係史料』大阪市史編纂所

・ AとCの絵図の地口寸法は石川県金沢城調査研究所2012『城郭石垣の技術と組織』掲載の写真から読み取った。

・ 築坪の検証にあたり反高の尺寸に一部誤記がみられたが、隣接丁場の数値により訂正した。

